



黄金の郷

こしえるびと

つむぐストーリー vol.60

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”のメッセージをシリーズで紹介していく。

ヒツジの王宮

田植えを終えた水田が広がる中に桂田勝浩さんの住む集落がある。桂田さんは幼い頃から家業の農業を手伝うのが当たり前の家庭で育ち、現在も会社経営の傍ら、父・清さんと家の田畑を守っている。しかし、この集落でも高齢化が進み耕作放棄地の保全が課題となり、耕作放棄地でヒツジを飼っている奥州市江刺の梁川地区を視察。「これだ」と感じた桂田さんの父・清さんはその場で5頭のヒツジを飼うことを決め、萩荘の下大桑地区の5人からヒツジの取り組みが始まった。勝浩さんも「この地域を何とかしなければ」と父と共にヒツジを通じて耕作放棄地の保全や地域振興に向け動き出した。

活動の広がり

下大桑ヒツジ飼育者の会を2016年に立ち上げ、会員は13人まで増えた。地域でヒツ

ジ100頭の飼育を目標に耕作放棄地に2つの放牧地を整備。ヒツジも繁殖16頭、出荷用と合わせて33頭まで増えた。ここで飼うのは食肉に適した「サフォーク種」だが、女性や子どもが羊毛を使った小物作りに取り組み、一関地方産業まつり農業祭で販売するなどヒツジを通じての活動にも広がりを見ている。「この集落が一つの家族だと思っている」と勝浩さん。「家族が困っていたら助けるのは当たり前」と続ける。地域が一つになり、子どもから高齢者まで笑顔で暮らせる地域づくりには夢は広がる。

地域の将来像

ヒツジは食用となるだけでなく、皮や毛も活用できる。肉に合うようにと勝浩さんが試行錯誤した焼肉のたれの販売のほか、放牧地をドックラン施設として活用、地域の米粉で作るパン工房、市内の福祉施設の通所者

に貸し出すいきいき農園、サツマイモ収穫体験を通じての世代間交流など下大桑集落の将来像はどれも希望に満ちあふれている。地域でのそれぞれの役割が定着してきており、「やらなければいけない」と意識が変わったのではと勝浩さん。この地域で働きながら子育てができるような、仕組みづくりも模索している。地域がまとまり、活気を取り戻してきている今、次の仕掛けをもくろむ。

——小さい集落だからこそ良さがある。一人ひとりが笑顔になれる活気のある集落を目指す。

私の一品



毛糸

手塩にかけて飼育した羊の毛を紡いだ毛糸。ショールや工芸品など幅広く活用することができます。県は、県産羊毛ブランド「i-wool」を立ち上げPRしています。

PROFILE

桂田 勝浩さん (55)

Masahiro Katsurada

一関市萩荘

1964年一関市萩荘生まれ。高校卒業後市内の会社に就職し、1995年OAや金型製造を行う桂田製作所を立ち上げ独立。会社経営の傍ら、家業の農業を手伝う。現在、米3畝、綿羊5頭を飼育する。祖父と両親、妻の5人暮らし。

ヒツジから広がる大きな夢

一関市萩荘 桂田 勝浩さん